

☼ 毎月23日は「福岡市 子どもと本の日」です ☼
 ～ 子どもの読書活動を推進しましょう ～

学校司書研修会の報告

1月18日（金）に、福岡市総合図書館で平成30年度第4回学校司書研修会が行われました。

午前は、図書館地区別研修（九州・沖縄地区）として専修大学文学部 野口武悟教授の講演を聴講しました。

演題は、「図書館のアクセシビリティ～誰もが利用できる図書館を目指して～」で、障害者差別解消法が施行され、公立図書館や学校図書館がどのような対応をしていけばよいかという内容でした。

午後は、全体会で学校指導課の瀬村主任指導主事から読み上げ冊数の調査結果や本年度の成果と課題など、学校図書館支援センターからは、3学期の学習支援用図書の利用状況の報告やLLブック※¹、マルチメディアDAISY※²（デイジー）などの説明がありました。

その後の分科会は、グループに分かれ年度末の業務や学校での取組みなどの情報交換でした。「図書館を利用する最初の時間にオリエンテーションをすることで、1年間図書館の使い方がよかった。」「蔵書点検をする時は、図書館以外の場所に図書館の本がないかどうかしっかり確認すること。」など、日頃学校司書が取り組んでいることについて意見がでていました。少しでも図書館の環境を良くし、本に親しませたい、という学校司書の熱意がよくわかる分科会でした。

連絡会終了後、多くの学校司書が、学校図書館支援センターの展示した本を見たり、読書相談員から説明を聞いたりしていました。とても有意義な研修会でした。



（図書館備品の実際の説明）



（熱心に講演を聞く学校司書）



（学校指導課の説明）



（マルチメディアDAISYの説明）



（グループに分かれて情報交換）



（展示された本を見る学校司書）

※¹ スウェーデン語で「やさしく読みやすい」を意味する言葉の略で、読みやすいよう写真や絵、絵文字、短い言葉などで構成された本。

※² パソコンやタブレット端末などで文章を音声で聞きながら画面上で絵や写真を見ることができる読書を楽しむためのツール。

3月生まれの文学者



江國 香織（えくに かおり）と「草之丞の話」

東京都 1964年3月21日生まれ

江國氏は、幼い頃、石井桃子氏の「うさこちゃん」シリーズの絵本がとても大好きでした。はじめは、将来作家ではなく果物屋さんになりたいと思っていましたが、中学生の時は書くことが好きで友だちと雑誌をつくっていました。その後は、映画の字幕をつける人になりたくて、目白学園短期大学国文科を卒業後、英語の専門学校に行きアメリカへ1年間留学しました。

留学する前から詩や童話を書いており、入賞してお金をもらえると、そのお金で旅行をしていました。書くことを仕事として考えるようになったのは、1989年に「409ラドクリフ」でフェミナ賞を受賞したことをきっかけに、いろいろな出版社から原稿依頼がきたり、選考委員の瀬戸内寂聴氏から「もし書くんだったら、本気で書かないとだめだよ。」と言われてたりしたからでした。

高校の教科書に要約が掲載されている「草之丞の話」は、1987年に小さな童話大賞を受賞しています。

江國氏は1日に3枚から5枚ぐらいを執筆しています。小説を書くときは、先に小説のタイトルができてから書き始めることが多いそうです。江國氏の作品は、「号泣する準備はできていた」（直木賞受賞）、「犬とハモニカ」（川端康成文学賞受賞）など、多数あります。

中島 京子（なかじま きょうこ）と「ハブテトル ハブテトラン」



東京都 1964年3月23日生まれ

両親がフランス文学者で大学教授だった中島氏は、幼い頃、まどみちお氏の「あいうえお絵本」で言葉遊びの面白さを体験し、まわりにあるたくさん本を読んでいたそうです。

東京女子大学文理学部史学科に入学すると、小説家になろうと思い、高校生を主人公にした青春小説のようなものを書いていました。

大学卒業後は、中国語を勉強していたので中国語が使える日本語学校に就職しましたが、そこがつぶれてしまい、主婦の友社に入社し女性誌の編集などをしました。出版社を辞めてから半年間ほど英会話学校に通い、インターンシップでアメリカのワシントン州に教育実習生として1年3か月ほど滞在しました。

帰国後は、請負でライターの仕事をしながらか小説を書いていましたが、ライターの仕事が忙しく、2、3か月書けない時もありました。5年ほどかけて田山花袋の「蒲団」を題材とした「FUTON」を書き上げ、作家デビューしました。

「ハブテトル ハブテトラン」は、広島県福山市の方言です。「ハブテトル」とは、備後弁で「すねている。むくれている。」という意味で、「ハブテトラン」はその否定形です。不登校の小学5年の少年が、東京の両親と離れ福山市の祖父母と一時期を過ごす物語です。

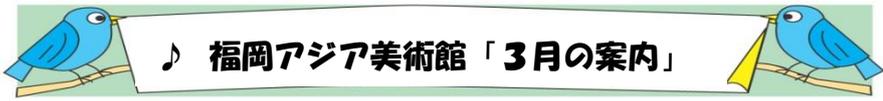
中島氏は、執筆するのは午前中2時間、午後は3時間ほどだそうです。作品は、「小さいうち」（直木賞受賞）、「妻が椎茸だったころ」（泉鏡花文学賞受賞）、「長いお別れ」（中央公論文芸賞・日本医療小説大賞受賞）など多数あります。

□ 図書館員のひみつの本棚《 No.154 》

福岡市総合図書館 読書相談員の重村さやかさんが、昨年度に引き続き毎月素敵な本を紹介してくださる楽しみなコーナーです。

今回の本は、スタジオジブリの宮崎駿監督が、岩波少年文庫から選んだ50冊の中の1冊です。野菜と果物たちの暮らす国で、無実の父を助けるためにたまねぎ坊やのチポリーノが大活躍する冒険物語です。とても楽しく読める一冊です。

★4月の本
 『チポリーノの冒険』(岩波少年文庫)
 ジャンニ・ロダーリ/作 関口 英子/訳 岩波書店 2010年 864円



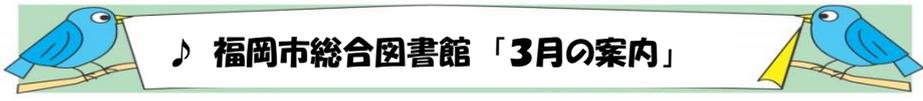
♪ 福岡アジア美術館 「3月の案内」



***アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ**

10日(日), 12日(火), 24日(日), 26日(火)

- ・時 間: 11:30 ~ 12:00 , 13:00 ~ 13:30
- ・場 所: 7階「キッズコーナー」(申し込み不要)



♪ 福岡市総合図書館 「3月の案内」



***毎月のおはなし会**

2日(土), 3日(日), 9日(土), 10日(日)
 23日(土), 24日(日), 30日(土), 31日(日)

- ・時 間 土曜日: 2日, 9日, 23日
 - 14:10 ~ 14:25 赤ちゃん向けおはなし会
 - 14:30 ~ 14:50 幼児向けおはなし会
- 30日
 - 14:30 ~ 15:00 幼児~小学生向けおはなし会
- 日曜日: 3日, 10日, 24日, 31日
 - 14:30 ~ 15:00 幼児向けおはなし会
 - 15:15 ~ 15:45 小学生向けおはなし会

・場 所 「こども図書館 おはなしの家」

☆ あとがき

中島京子氏は、2003年「FUTON」で作家デビュー後、2005年に2作目の「イトウの恋」を出版しました。2作目のイトウの恋を出版する2年間の生活は、「FUTON」の評判がよかったので、「次の作品は変なものを出せない。」と思う一方「はやく次の作品を出さなくちゃ。」というプレッシャーがあり、執筆の時間を作るためにライターの仕事が減らしていたので、ものすごく貧乏な生活になり辛かったそうです。

学校司書研修会の講演で専修大学の野口教授は、日本における障がい者の現状として、「身体障がい者・知的障がい者、精神障がい者(発達障がい者を含む)をあわせると、子どもはその約10%を占め、すべての学校に在籍している。」ということです。学校で配慮が必要な子どもたちと接する学校司書の先生にとって、いろいろ参考になったのではないかと思います。

発行：福岡市教育委員会 生涯学習課

電話：092-711-4655 FAX：092-733-5538

図書館員のひみつの本棚 第154回

今月はイタリアの物語です。

『チポリーノの冒険』(岩波少年文庫)

ジャンニ・ロダーリ/作 関口 英子/訳 岩波書店 2010年 864円

<お勧め年齢>

乳幼児—— 低学年—— 中学年—— 高学年☆☆☆ 中学生☆☆
高校—— 一般——

(☆が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

玉ねぎの男の子チポリーノが、無実の罪で牢屋に入れられた父親を助けるため、仲間たちと、人々を苦しめるレモン大公やトマト騎士に立ち向かう痛快な冒険物語。

<子どもに手渡す時のポイント>

1951年にイタリアで刊行された物語。著者は国際アンデルセン賞の作家賞を受賞しています。

人々を苦しめる側が果物、立ち向かう側の人々が野菜、と設定は可愛らしいのですが、アイロニー(皮肉)を含んだ物語は、人間社会のあり様をしっかりと描き、そこにポジティブなユーモアがたっぷりと加えられ、テンポのよい展開がそれを引き立ててくれます。

ぜひ高学年以上の子どもに手渡してみてください

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。

